

## 『通俗学術雑誌 先世』総索引

## 幻の雑誌『教材集録』の探究と『通俗学術雑誌 先世』の発見

## 1 発見の経緯

『通俗学術雑誌 先世』(以下、『先世』と略す)は、明治38年11月3日に第1巻第1号が発行され、明治39年5月3日発行の第1巻第7号までの7冊が、東京大学大学院法学政治学研究科附属近代日本法政史科センター(明治新聞雑誌文庫)に所蔵されている。このうち、明治39年2月発行の第1巻第4号から第7号までの4冊は、編輯兼発行者が、牧口常三郎であり、第7号には、牧口の「ヴェスヴィアス山の噴火」という講話を掲載している。

『先世』という雑誌に牧口が関与していたことは、関係者の聞き書きや今まで出版された伝記・年譜にも触れられていない。発見に至ったのは、牧口常三郎の関係資料の中で、実在がつかめないもののひとつに『教材集録』があり、これを常に意識していたことにある。その手がかりを探すために、明治36年から41年にかけて出版された新聞及び雑誌の目次、広告や書評、寄贈・交換雑誌の一覧などに目を通す作業をしていたからである。

## 2 『先世』と『教材集録』

幻の『教材集録』について記述された文献の代表的なものとしては、聖教新聞社から昭和47年に出版された『牧口常三郎』がある。その中で、『人生地理学』出版後の活動のひとつとして、「牧口は自ら小冊子『教材集録』を編集している。これは、日々変わりつつある生活現象の真相に即して、毎日の新聞や雑誌等のなかから、教師が授業を展開していく上で、役に立つ教材となるような記事を見つけ、蒐集し、あわせて国定教科書中の関係教科、関係箇所を明確にしたものである。忙しさに追われてなかなか勉強のできない教師達の間で好評だったのみならず、生きた教材に接した生徒達の間でも、そのことによって興味を喚起されたものも少なくなかった」<sup>(1)</sup>とある。巻末の年譜では、1905年(明治38年)の項目として、「この頃経済的安定をはかるため様々の職業につく。茗溪会(東京高等師範学校同窓会)の書記、雑誌『教育』の編集、弘文学院の地理科講師、小冊子『教材集録』の編集、女学校講義録(現在の通信教育の一種)等の仕事を転々とするが結局失敗に終わる」<sup>(2)</sup>とある(下線筆者)。

このことは、平成5年に第三文明社から出版された『年譜 牧口常三郎戸田城聖』にも掲載され、1905年(明治38年)の項目に、「小学校教育の補助教材として小冊子『教材集録』を編集する」<sup>(3)</sup>とあり、同書の「著作・寄稿・出版一覧」の出版の項目に、「明治38年2月20日 小冊子『教材集録』」<sup>(4)</sup>とある。しかし、この記述の根拠を特定することは出来なかった。

また、平成15年に聖教新聞社から出版された『創価学会 三代会長年譜 上巻』においても、「月が不明で年や時期が確定している事項」<sup>(5)</sup>として、1905年(明治38年)の項目に、「小学校教育の補助教材として小冊子『教材集録』を編集する」<sup>(6)</sup>と記載している。

小冊子=単行本としての『教材集録』は、どこの図書館も所蔵していない。しかし、『教材集録』というタイトルの雑誌は、存在する。南光社発行の『最新変動 教材集録』である。この

雑誌は、明治45年6月15日に、第三種郵便物の認可を受けている。バックナンバーを全て見ることはできないので完全に否定は出来ないが、明治38年前後には、当然、南光社の『教材集録』は存在していない。

また、当時の新聞の書評、新刊紹介欄などに教材集録が見あたらないことから、「小冊子『教材集録』とは、まず、小冊子とは、雑誌も含む薄い本という形態を表現するものであり、「教材集録」という言葉も、本の内容を意味するもので、タイトルは教材集録ではないのではないかと考えるようになった。それは、明治期の牧口に関する伝記・開書き記録を調査するなかで、この時期の開書きに拠る記述が、正確に固有名詞等を表記していないことがあるという経験に基づくものである<sup>(7)</sup>。

小冊子『教材集録』が、単行本として出版されたとするならば、図書館に所蔵されていなくとも図書総目録に掲載されているはずである。明治39年10月に出版された『東京書籍商組合図書総目録 第3版』<sup>(8)</sup>の文会堂の出版書籍には、『人生地理学』とともに、『教科日誌 日本地理』と『教科日誌 外国地理』が掲載されている。2冊の『教科日誌』は、未発見だが、『早稲田学報』<sup>(9)</sup>等の書評と広告からその概要を知ることができる。体裁は小冊子と呼ぶにふさわしいが、『教科日誌』は、本来、弘文学院で学ぶ中国人留学生のためのサブノートとして考案されたもので、それを広く中等学校の学生の便に供するために出版されたものである。よって、聖教新聞社『牧口常三郎』で紹介されている内容とは異なるので、この2冊をもって、幻の『教材集録』とみなすことはできない。

### 3. 『先世』の編集方針

『通俗学術雑誌 先世』の第1巻第1号の表紙裏には、「先世の目的は、学術技芸及び諸般の知識を普及し、発明を促進奨励するにあり。」とあり、「先世の特色は、記事の正確なる、有益なる、且興味あることなり。講話は斯道に最も通じたる学者名士に就きて、特に本誌の為に講述せられたるものゝみを掲ぐ。発明特許彙報は他に類例なきものなり。」としている。

更に、発刊の辞には、「吾々の主眼とする所は或る専門の学術に関して最も確実なる知識を有する人の説を求めて何人にも分り易く極めて通俗に之を紹介することである」と述べている。

本誌の目的にも明らかなように、学術等の知識の普及と広い意味での発明の促進奨励を目指すものであり、何人かの講話と発明特許彙報と雑録で構成され、ほとんど広告を載せない紙面構成となっている。

『先世』は、当然、教師の中で購読する人もいたと思われるが、教師を対象とした教育雑誌ではなく、より幅広い読者層を想定した雑誌である。

### 4. 『先世』と牧口常三郎

次に、牧口常三郎と『先世』との関係についてみてみたい。

『先世』創刊時は、編輯兼発行人は、豊田潔臣で、発行所の先世社の住所は、東京市神田区駿河台北甲賀町十番地になっている。明治39年2月の第4号から牧口が編輯兼発行人となり、先世社の住所は、東京市神田区三崎町三丁目一番地 大日本高等女学会構内に移転している。明治38年5月に大日本高等女学会を創立し、実質的な運営を行う主幹であった牧口は、同じ建物に先世社も置き、その業務を行っている。豊田潔臣は、どのような人物か詳細は不明だが、『先世』の創刊時から既に先世社と牧口との関係があったことは推測できる。その理由は、第

1巻第1号に、大下藤次郎が編輯する『みずゑ』と同じ大下の経営する内外出版協会が各1頁、山根吾一<sup>(10)</sup>の編輯する『渡米雑誌』と、牧口が主幹を務める大日本高等女学会が1頁の広告を出しているからである。広告は、第2号から第6号には掲載されておらず、第7号に、大下藤次郎の『みずゑ』と大日本高等女学会の月刊女性雑誌『家庭楽』があるのみである。

『先世』が毎回講話を掲載している人物に池田夏苗がいる。池田夏苗は、牧口が主幹を務める大日本高等女学会が発行する講義録『高等女学講義』で英語の講義を担当している。その兄で、味の素の発明者である池田菊苗の講話も2度掲載されている。

『先世』の編輯兼発行人となった明治39年2月ごろの牧口は、どのような仕事をしていたであろうか。まず、主たる仕事としていた大日本高等女学会は順調に拡大をしている時期である。明治38年5月に創立した同会は、明治39年11月には、全国で2万有余の女性が『高等女学講義』を購読していたと考えられる<sup>(11)</sup>。また、明治39年は会員が毎月着実に増えていたと思われる。同会の運営と月2回発行の『高等女学講義』と月1回発行の『家庭楽』の編集、自身も前書に世界地理の講義を連載している。多忙の為か、明治38年12月には、『人生地理学』出版直後の明治36年11月1日から勤務していた茗溪会を退職している<sup>(12)</sup>。しかしながら、弘文学院と東亜女学校では、明治40年4月まで教鞭をとっているため、明治39年初め頃の牧口は実に多忙の日々を送っていると思われる。新たに『先世』の編輯兼発行人を積極的に兼務しなければならない理由は見えてこない。総合的な事業拡大を考えていたか、もしくは、友人から頼まれたという可能性も推測できる。

『先世』は、東京大学の明治新聞雑誌文庫には、第1巻第7号まで所蔵されているが、明治39年5月3日発行の第7号以降が発行されている可能性を示す資料は、現在のところ発見できていない。引き受けた理由とともに、なぜ短期間で廃刊になったか、もしくは、継続しているのかは、今後の研究課題である。

## 5 『教材集録』の存在する可能性と『新教材集録』の発見

聖教新聞社『牧口常三郎』において紹介されている教師のための雑誌『教材集録』のイメージと『先世』の内容とは必ずしも一致しない。『教材集録』は別に存在するのであろうか。現在のところその痕跡すら見つけることは出来ていない。もし、あるとして、明治38年と考えた場合は、牧口が、自ら主幹となって明治38年5月に大日本高等女学会を創立していることから、同会創立への動きが活発化する前の4月以前の可能性が高いだろう。しかし、4月以前であっても東京高等師範学校の同窓会茗溪会書記として、雑誌『教育』の編輯等の仕事をしており、弘文学院の地理科講師、東亜女学校の教師として諸科目を教えているので多忙であることは変わらない。筆者は、今のところ、「教材集録」とは『先世』のことではないかと考えている。しかし、大日本高等女学会の主幹を務める中で、『教科日誌』を出版し、『人生地理学』の訂正増補の原稿を書きつづけていた牧口であるから、『先世』とは別に、『教材集録』もしくはそれに相当する出版をやっているかもしれない。

幻の『教材集録』を探しつづけていたことは、思わぬ発見を生んだ。昭和8、9年に発行されていた『進展環境 新教材集録』(城文堂発行)1冊、『新教材集録』(日本小学館)8冊の発見である。牧口が、『創価教育学体系』第1巻を出版した昭和5年の5月頃、戸田城外(後の城聖)は、城文堂から『新進教材 環境』という月刊教育雑誌を創刊した<sup>(13)</sup>。その後、昭和7年12月頃には、『進展環境 新教材集録』の創刊<sup>(14)</sup>となり、昭和9年初め頃には、『新教材集

録』、昭和10年8月頃には、『新教』、昭和11年7月には、『教育改造』と改題されていく<sup>(15)</sup>。これはまさに聖教新聞社『牧口常三郎』で記述している教師のための雑誌であり、特に、『新教材集録』以前のものは教師のための教育雑誌の色彩が鮮明で、牧口常三郎の創価教育学の普及を目指して編集されていることが紙面構成から見て取れる。しかし、この『新教材集録』の「新」は、明治38年の幻の『教材集録』に対しての「新」ではなく、当時出版されていた南光社発行の『最新変動 教材集録』に対する「新」ではないかと考えている。

## (注)

- (1) 『牧口常三郎』(聖教新聞社 昭和47年) 51-52頁。
- (2) 前出、502頁。
- (3) 『年譜 牧口常三郎戸田城聖』(第三文明社 平成5年) 39頁。
- (4) 前出、519頁。
- (5) 『創価学会 三代会長年譜 上巻』(聖教新聞社 平成15年) 凡例4頁。
- (6) 前出、50頁。
- (7) 『大白蓮華』第12号(聖教新聞社 昭和25年11月)、14頁の「牧口先生の御一生」の明治38年頃の記述を例にすると、文末に「近親者の談話を基として書き綴る・原島宏治」として、「殊に最後の大日本女学講義は、会長に二条侯副会長に青木子爵等の名前をあげ、視学浜幸二郎と協力して大々的に発足したのであるが」とあるが、『大日本女学講義』は、『高等女学講義』の誤りで、会の名称である大日本高等女学会と混同したと考えられ、二条侯、青木子爵は、それぞれ同夫人であり、会の発足から2年後の1910年12月に会長、副会長になっている。浜幸二郎は、幸次郎の誤り。明治38年の大日本高等女学会の創立は浜と牧口の二人が中心になって行った。
- (8) 『東京書籍商組合図書総目録 第3版』(東京書籍商組合事務所 明治39年)、192、406頁。明治44年発行の同目録第4版にも掲載されているので、短期間で絶版になったとは考えにくい。
- (9) 『早稲田学報』117号(早稲田学会 明治39年5月1日)、49頁の「寄贈新刊」には、「教科日誌 日本地理 外国地理 牧口常三郎著 東京 発兌 本書は中学校、師範学校、高等女学校及びこれと全等の諸学校の学生並びに自修者の日本地理外国地理研究上の一助にもと編纂せるものにして、教室若しくは自宅に於ける学習の際要点を秩序正しく摘書して記憶に便ならしむることを期し、順序及び項目は、大体文部省訓令の中学校教授要目に則り、且つ現今最も好評ある志賀山上氏等の地理書を参考したりと云ふ。(定価日本の部金拾銭外国の部金拾貳銭)」とある。書評は、他に、『教育時論』721号(開発社 明治39年4月25日)、28頁、『渡米雑誌』第9年第3号(渡米雑誌社 明治39年3月3日)、16頁に掲載されている。よって、出版時期は、明治39年初頭と推測できる。
- (10) 山根吾一は、片山潜の後を引き継いで、渡米協会の運営にあたった。岡林信夫『ある社会主義者の肖像—山根吾一覚書—』(不二出版 平成12年)に詳しい。山根と牧口との交友についても触れている。
- (11) 萬朝報 明治39年11月11日付4面の広告には、「大好評を博し己に二万有余の会員あり」とある。
- (12) 明治42年1月の牧口の履歴書によれば、「明治三十六年十一月一日 茗溪会ヨリ一任セラレ庶務会計編輯ノ事務ニ全三十八年十二月マテ従事ス」とある。
- (13) 『新進教材 環境』第1巻第9号(城文堂 昭和5年11月発行)の表紙には、「昭和5年5月26日 第三種郵便物認可」とある。
- (14) センターの所蔵する『進展環境 新教材集録』第3巻第14号(城文堂 昭和8年12月発行)の表紙には、「昭和7年12月28日 第三種郵便物認可」とある。
- (15) 『新教』『教育改造』の表紙には、「昭和7年12月28日 第三種郵便物認可」とあり、巻号のつけ方も『進展環境 新教材集録』からの改題の扱いをしていると考えられる。

(塩原 将行)

凡 例

- 一、本文の表記により記載したが、旧字体で記載できない漢字については、新字体に改めた。
- 一、欄外には出版年月日、巻、号、編輯兼発行者を記載した。
- 一、巻数表示はアラビア数字に統一した。
- 一、「始頁」欄には本文が開始されたページ数を記載した。作品にページ番号の表記がない場合は、本文のページ数を数えた上で（ ）に入れて記載した。
- 一、「終頁」欄には本文が終了したページ数を記載した。作品にページ番号の表記がない場合は、「始頁」と同様とした。
- 一、「作品名」欄には作品のタイトルを記載した。但し、記号等は省略した。本文にタイトルがない場合は内容をイタリック体で記載した。なおこれについても本文の表記により記載したが、旧字体で記載できない漢字については、新字体に改め記載した。
- 一、「作者名」欄は本文の表記にしたがって記載した。
- 一、「種類」欄は目次による分類にしたがった。
- 一、「備考」欄には本文の内容表記と目次表記が明らかに違うものを記載した。これには作者名も含まれる。

(作成者：北川洋子)

明治38年11月3日（第1巻第1号）豊田潔臣

始頁	終頁	作品名	作者名	種類	備考
表紙	表紙	表紙/要目			
		本誌の目的/本誌の特色/奥付			
口絵		多摩川上流白丸の秋	大下藤次郎	画	目次では多摩川の紅葉(百版)と記載
		発刊の辞			
		目次			
1	5	日本の紅葉	齋田功太郎	講話	
6	12	食塩	池田菊苗	講話	
12	19	マッチの製法	住友兼吉	講話	
19	19	短歌 俊成卿/公任卿			
20	27	大發明家アルキメデス	池田夏苗	講話	
27	33	米國の富に就きて	斯波貞吉	講話	目次では米國の富に就いてと記載
33	33	短歌 和泉式部/源重之/躬恆			
34	34	予告			
35	37	實用新案法		發明特許彙報	
37	39	最近の特許品		發明特許彙報	
39	39	改良は發明		發明特許彙報	
39	39	外國に於ける發明の獎勵		發明特許彙報	目次では發明の獎勵と記載
39	40	日本人は發明に適しないか		發明特許彙報	
40	40	發明より大なるものなし		發明特許彙報	
40	40	發明は無益であるか		發明特許彙報	
40	41	發明家と常識		發明特許彙報	
41	41	近年の大發明 蒸氣、電氣、X線			
42	42	樺太の氣象		雜録	
42	42	樺太石油發見		雜録	
42	42	島の數		雜録	
42	43	最大の動物		雜録	
43	43	最高の動物		雜録	
43	44	物の速さ		雜録	
44	44	人の分娩の時間		雜録	
44	44	大象		雜録	
44	44	女護の島		雜録	
44	45	朝鮮の農産物		雜録	

45	45	辛崎の松		雑録	
45	46	甘藷		雑録	
46	46	植物の數		雑録	
46	47	柿		雑録	
47	47	テキサスの日本人		雑録	
48	48	日本の沈没船引揚工事		雑録	
48	48	獨逸への輸出入減す		雑録	目次では獨逸への輸出入減少と記載
48	48	日本電氣の進歩		雑録	
(49)	(49)	広告 春鳥會			
(50)	(50)	広告 内外出版協會			
(51)	(51)	広告 渡米協會			
(52)	(52)	広告 大日本高等女學會			
(53)	(53)	広告 紅屋洋品店/南北屋			
裏表紙	裏表紙	広告 富山房			

## 明治38年12月3日(第1巻第2号) 豊田潔臣

始頁	終頁	作品名	作者名	種別	備考
表紙	表紙	表紙/要目			
		本誌の目的/本誌の特色/奥付			
口絵		東京灣(海苔採集期)			
1	7	淺草海苔	岡村金太郎	講話	
8	12	戦後經營の最急務	山根正次	講話	
12	19	石鹼製造法	住友兼吉	講話	
20	26	亞弗利加の小人國	豊田潔臣	講話	
27	36	クリスマスの話	池田夏苗	講話	
37	40	最近の特許品		發明特許彙報	
40	42	最近の實用新案		發明特許彙報	
42	43	特許出願の旨意		發明特許彙報	
43	43	便利か不便利か		發明特許彙報	
43	43	發明に必要な學問		發明特許彙報	
44	45	蜜柑		雑録	
45	45	世界の植物園		雑録	
45	46	樺太島の農業		雑録	
46	46	本年の麥と米		雑録	
46	47	米國昨今の米作		雑録	
47	47	滿州の柞蠶絲		雑録	
47	47	暹羅の蠶況		雑録	
47	48	樺太島の漁業と狩獵		雑録	
49	49	人の猿真似		雑録	
49	50	日光浴治療術		雑録	
50	51	癩病		雑録	
51	51	新高山登攀		雑録	
51	51	印度洋探險		雑録	
51	51	世界週航商品陳列船		雑録	
51	52	横濱桑港間の快走		雑録	
52	52	海底電線の世界一週		雑録	
52	52	電氣發動汽船		雑録	
52	52	無線電信機裝置の列車		雑録	

## 明治39年1月3日(第1巻第3号) 豊田潔臣

始頁	終頁	作品名	作者名	種別	備考
表紙	表紙	表紙/要目			
		本誌の目的/本誌の特色/奥付			
口絵		馴鹿の圖/麋の圖			要目では馴鹿及麋と記載
口絵		東京瓦斯會社第二製造所傾斜式瓦斯爐階上の圖/同上瓦斯清淨器械の内冷縮器及掃攘器(工事中)の圖			要目では瓦斯爐及瓦斯清淨器と記載
1	7	瓦斯工業の話	水田政吉	講話	
7	13	麥酒釀造法	三谷美種	講話	
14	20	世界第一の隧道シムロン	池田夏苗	講話	
20	25	象の話	豊田潔臣	講話	
26	33	維新前の大發明家近江大徳	斯波貞吉	講話	
34	36	最近の特許品		發明特許彙報	
36	38	最新の實用新案		發明特許彙報	

38	38	特許出願数		發明特許彙報	
38	38	實用新案出願数		發明特許彙報	
38	38	特許出願数と許可の割合		發明特許彙報	
38	42	世界の大發明		發明特許彙報	
42	43	馴鹿と麋		雜録	
43	43	鶴と龜		雜録	
43	44	鮎と鱧		雜録	
44	44	林檎		雜録	
44	45	冬の野菜		雜録	
45	46	黄金の産出		雜録	
46	46	石油の産出		雜録	
46	47	世界第一の高屋		雜録	
47	47	空中の有様		雜録	
47	47	世界最大の戦艦		雜録	
47	48	艦底の改良		雜録	
48	48	ゴムの製造		雜録	
48	48	アンチモニー製造		雜録	
48	48	印度に於ける日本燐寸		雜録	
48	48	南米航路の初航		雜録	
48	49	アルゼンチンと日本商品		雜録	
49	49	ヒリッピンの鐵道敷設		雜録	
49	49	喫煙と各國		雜録	
49	49	太陽の黒點		雜録	
49	50	恙蟲病原發見		雜録	
50	50	電車救難器發明		雜録	
50	50	肺病種痘療法の發明		雜録	

明治39年2月3日(第1巻第4号) 牧口常三郎

始頁	終頁	作品名	作者名	種別	備考
表紙	表紙	表紙/要目			
		本誌の目的/本誌の特色/奥付			
口絵		空中懸垂鐵道 街上架設之圖/ウツベル河上架設之圖			要目では空中懸垂鐵道街上の架設/河上の架設と記載
口絵		イエローストーン公園 マンモス温泉/カッスル噴泉			要目ではイエローストーン公園と記載
1	7	眞珠の話	岩川友太郎	講話	
7	13	鍍金術	住友兼吉	講話	
14	23	世界最大の公園イエローストーン	池田夏苗	講話	
23	27	空中懸垂鐵道	豊田潔臣	講話	
28	34	我國の工藝	高山榮一	講話	要目では日本の工藝と記載
35	38	最近の特許品		發明特許彙報	
38	39	最新の實用新案		發明特許彙報	
39	40	發明の必要迫る		發明特許彙報	
40	40	今後の發明		發明特許彙報	
40	41	特許と内外人		發明特許彙報	
41	41	十二年間の特許件数		發明特許彙報	
41	43	ノベル賞金受領者		雜録	
43	45	臘虎		雜録	本文中では獵虎と記載
45	46	山茶と茶梅		雜録	
46	46	世界最大の花		雜録	
46	46	滿洲の農作		雜録	
46	47	臺灣の樟樹		雜録	
47	47	奥羽の凶作と氣象		雜録	
47	47	電氣と種子の發芽		雜録	
47	47	ゴム製造の成功		雜録	
47	48	航海と液体燃料		雜録	
48	48	極東探險		雜録	
48	48	西藏探險		雜録	
48	49	磁氣極點の發見		雜録	
49	49	爆發薬の新原料		雜録	
49	49	硝子の原料		雜録	
49	50	我國の陶器磁器		雜録	
50	50	沈設水雷の發明者		雜録	
50	50	害蟲驅除電車		雜録	
50	50	本社の移轉と社務擴張		雜録	

## 明治39年3月3日（第1巻第5号）牧口常三郎

始頁	終頁	作品名	作者名	種別	備考
表紙	表紙	表紙/目次			
		本誌の目的/本誌の特色/奥付			
口絵		汽車の今昔 ニュルンベルヒ・フルテル 鐵道開通時(今ヨリ七十年前)の光景/ 最近の機關車(速力一時間九十哩)			目次では汽車の今昔 七 十年前の汽車/最新の汽 車と記載
口絵		蒸氣機關の發明者ジェームス・ワット			目次では蒸氣機關の發 明家ジェームス・ワット氏 肖像と記載
口絵		電氣鐵道の發明者ウェルネール・フォン・ シーメンス			目次では電氣鐵道創設 者ウェルネール・フォン・ シーメンス氏肖像と記載
1	14	平野の出來かたと其人文の關係	山崎直方	講話	目次では、平野の出來方 と其人文に對する關係と 記載
15	24	微毒に就て	津久井省巳	講話	
25	34	英國民の膨脹	岡田惠市	講話	
34	38	汽車の今昔	池田夏苗	講話	
39	40	我國の發明界	老谷生	發明特許彙報	
40	40	各國專賣特許狀數	老谷生	發明特許彙報	
40	42	日本最近の發明	老谷生	發明特許彙報	
42	44	最新の實用新案	老谷生	發明特許彙報	
45	45	世界の最大旅館		雜録	
45	45	人口十万以上の世界の都會		雜録	
45	46	火星に人が住むか		雜録	
46	47	人造絹の盛況		雜録	
47	48	鰐魚の番鳥		雜録	
48	48	小兒の死亡率		雜録	
48	49	英國科學組合		雜録	
49	50	フォン・ペーリング教授の新肺病藥		雜録	
50	50	海中の淡水泉		雜録	
50	50	水難救命法の發明		雜録	

## 明治39年4月3日（第1巻第6号）牧口常三郎

始頁	終頁	作品名	作者名	種別	備考
表紙	表紙	表紙/要目			
		本誌の目的/本誌の特色/奥付			
口絵		スヴェン・ヘチン氏旅裝の像/ムスタガタ 山のテルゲン・ブラク氷河			
口絵		智利國アタマワの沙漠(硝石原産地)/ 同上硝石精製所			要目では全上硝石精製 所と記載
1	6	空氣より肥料の製造	池田菊苗	講話	
7	15	精神の素質	阿部文夫	講話	
15	20	臆駭歌の話	豊田潔臣	講話	要目ではオツトセイと 記載
20	26	石器時代の廢物利用品	中村士徳	講話	要目では石器時代の廢 物利用と記載
26	36	スヴェン・フォン・ヘチン氏の探險	池田夏苗	講話	要目ではスヴェン・フォ ン・ヘチン氏の中央亞細 亞探險と記載
37	39	最近の發明品		發明特許彙報	
39	39	最近の實用新案		發明特許彙報	
40	40	砂鐵の性質用途及び採集法につき		質問應答	
40	40	馬鈴薯より澱粉を製取すること		質問應答	
41	41	智利硝石の原産地		雜録	
41	43	獨逸の一元論者の團體創立		雜録	
43	43	繙帶に硝子の利用		雜録	
43	44	特許品展覽會開催の計畫		雜録	
44	45	世界に於ける大學の數		雜録	
45	46	米國の大疏水工事		雜録	
46	46	米國南部諸州の發達		雜録	
46	46	エスペランド語		雜録	
47	47	羅馬字ひろめ會		雜録	
47	48	北海道移住の獎勵		雜録	
48	48	倫敦旅館の電話裝置		雜録	

48	49	降雹豫防法		雑録	
49	49	鐘淵紡績會社の發明獎勵		雑録	
49	49	醬油釀造機の發明		雑録	
49	49	百廿三年間の盡力		雑録	
49	50	自働製菓器		雑録	

明治39年5月3日（第1巻第7号）牧口常三郎

始頁	終頁	作品名	作者名	種別	備考
表紙	表紙	表紙/要目			
		本誌の目的/本誌の特色/奥付			
口絵		イタリア國ナポリ灣			
口絵		タクラ・マカン沙漠			実際の口絵には存在しない
1	8	石炭瓦斯製造の副生物	高松豊吉	講話	
9	17	石炭の産出	肝付兼行	講話	
18	26	ヴェスヴィアス山の噴火	牧口常三郎	講話	
27	40	スヴェン・フォン・ヘデン氏の探險(續き)	池田夏苗	講話	要目ではスヴェン・フォン・ヘデン氏の中央亞細亞探險(續き)と記載
41	41	英佛間の海底隧道		雑録	
41	43	五大洲連絡鐵道		雑録	
43	43	製紙の新原料		雑録	
43	43	麻醉劑としてのダイナマイト		雑録	
44	44	パリ市街の掃除料		雑録	
44	44	軍用自働車の發明		雑録	
44	45	滿洲博覽會		雑録	
45	46	鹿兒島鐵道隧道工事		雑録	
46	47	馬匹の改良		雑録	
47	48	臺灣の大震災		雑録	
48	50	最近の特許品		發明特許彙報	
(51)	(51)	広告 春鳥會/大日本高等女學會 出版部			
裏表紙	裏表紙	広告 大日本高等女學會			